積み重ねた努力、知見、工夫が結実 飼料用米生産で2年連続の全国表彰

「令和7年度飼料用米多収日本一」の授賞式が開かれ、久保徳太郎さん＝下宿間＝が「単位収量の部」で全国2位となる農産局長賞に選ばれました。

この表彰は先進的な生産技術で模範となる飼料用米の生産者をたたえ、成果を広く紹介するために行われています。久保さんの受賞は前年の「地域の平均単収からの増収の部」に続き、2年連続の快挙です。久保さんの7年度の作付面積は約1・7ヘクタール。水量が豊富な地域特性を生かし、水のかけ流しで高温障害を避けるなど工夫を重ねています。10アール当たりの収量は818キロで、前年からさらに34キロ増加しました。受賞について久保さんは「一緒に試行錯誤している農家仲間も喜んでくれた。互いに情報交換をしながら、これからも毎年勉強です」と、実り多い一年を振り返りました。

「受賞後は仲間とお祝い。それも次の励みに」と久保さん

資源を生かした新事業で地域活性化 思いの実現に向けて「ビジコン」開催

ビジネスプランコンテスト「UCHI・GO」の最終審査会が3月29日、六日市自治会館で開かれました。一次審査を通過した5人と特別参加の愛媛大学生が、専門家の助言を受けて練り上げたプランに思いをのせて発表しました。

審査は物語性やこだわりなど6つの視点で行い、来場者も投票に参加。グランプリは武田愛さんの「精油×調香デザインビジネス」で、森林資源を活用したアロマを企業ブランドづくりに生かす提案は、独自性や地域産業への好影響が期待できると高く評価されました。

武田さんは木材を「香り」という体験に転換し、商品化するプランを発表

まちの財産を災害から守るために 「景観まちづくりフォーラム」

「内子は地震保険加入率が低い。再建に自己資金は必要」と大本さん

景観を未来につなぐための意識高揚を図る「景観まちづくりフォーラム」が3月26日、町民会館で開かれました。今回は防災をテーマに、愛媛大学地域協働センター南予副センター長の大本敬久さんが講演。東日本大震災などの災害と復興の事例に触れ、「内子の町並み保存地区では全国に先駆けて防災計画を策定した。地震被害を想定した対策が必要」と解説。地震保険への加入など、個人で備える大切さも訴え「景観は地域の宝。災害時には、心の復興の力になる」と呼びかけました。

ポストがまちの情報への入り口に 内子郵便局へ案内用ステッカーを贈呈

内子町の情報サイトなどをまとめた「ポストステッカー」が完成し、贈与式が4月2日、JR内子駅前で行われました。

内子町と日本郵便㈱は町民サービスの向上を図る「包括的連携に関する協定」を締結しています。その一環で内子町は、公式SNSや防災情報・観光情報にアクセスする二次元コードを記載したステッカーを作成。町内の郵便ポスト57本に貼り付けて情報発信を図ります。内子郵便局長の大政啓さんは「身近にあるポストを介して、地方創生の力になりたい」と話しました。

小野植正久町長（左）からステッカーを受け取る大政局長

内子高校本校の魅力化へ新しい学び場 自由に学べる公営塾がプレオープン

プレオープン日に訪れた生徒たち。どう使うかは自主性に重きを置く

内子高等学校で新しい学びの場を提供するため「内子町学習センター」を開設し、4月13日から運営を始めました。同校生徒専用のスペースとして、校内の一教室を平日の放課後から午後9時まで無料開放。スタッフが常駐し、自主学習や試験対策、進路相談などに応じます。部活動の前後やJRの待ち時間など、幅広い活用が想定されます。今後、より生徒たちのニーズに沿う運用を検討していきます。

詳細は公式インスタグラムで公開▼

『広報うちこ』3年連続で全国入選 読売新聞社賞&入選1席をダブル受賞

「令和8年全国広報コンクール」（公財）日本広報協会主催）の審査が行われ、『広報うちこ』2025年1月号が広報紙町村部で読売新聞社賞と入選1席を受賞しました。

読売新聞社賞は、地域の課題や出来事などを積極的に取り上げ、住民の視点を大切にした作品に贈られ、内子町では2回目の受賞です。受賞号では、遊休農地の再生に挑む「内子町青年農業者協議会」の皆さんを特集。荒れた農地を耕して新規就農希望者につなぐなど、まちの農業を守ろうと奮闘する姿を伝えました。他にも皆さんからの投稿写真が並ぶ「笑顔の表紙」など、住民の輝きが詰まった紙面となっています。

これからも地域の魅力や人々の思いを伝え、皆さんに親しまれる広報紙を目指していきます。

▶▼受賞した2025年1月号